

N1 à N2 における à の機能と意味構造

－N1 avec N2 との対比を通して

梶原 久梨子（大阪大学）

本発表は、複合名詞 N1 avec N2 と競合する N1 à N2（avec 型 N1 à N2）の構造と、その場合の前置詞 à の機能について検討する。先行研究では、このような N1 à N2 について、「à は N2 を N1 の本質的性質として提示する」（Anscombre1990）、「à は N1 の下位クラスを構築する」（Cadiot1991）「à には属性を示す機能がある」（Cadiot1993）、「avec は自律した実体の共存であるのに対し à は統合的に捉える」（Schapira2005）と指摘され、いずれの見解も直感的には妥当であるように思われる。しかし、なぜ名詞句<N1 à N2>において、à が avec と競合するかということは、管見の限り明確にはされていない。本稿では、次の 2 点を明らかにすることを目的とする。

RQ①< N1 à N2>と< N1 avec N2>が成立/不成立する条件及び両者の意味的差異

RQ②< N1 à N2>における à の機能

まず N1 à N2 の関係や性質から、外発的特徴型、内発的特徴型、一時的特徴に分類する。

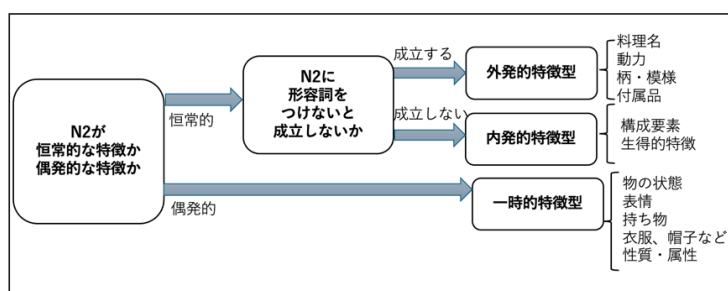


図 1. 本発表で扱う N1 à N2 の分類

外発的特徴型の例：glace à la vanille, moulin à vent, robe à fleurs, instrument à cordes など。

内発的特徴型の例：maison au toit rouge, pull aux manches longues, garçon aux yeux bleus, femme aux cheveux blonds など。

一時的特徴型の例：voiture aux vitres ouvertes, fille au sourire radieux, fille au chapeau rouge など。

RQ①について、分類したタイプごとに、N1 à N2 と N1 avec N2 の交替可能性およびそれぞれが現れる文脈の違いを検証する。N1 à N2 は識別的な文脈で、N1 avec N2 は説明的な文脈で現れやすいことを指摘する。識別的とは、N1 の集合から当該の N1 を同定することであり、説明的とは、N1 の特徴や状態の情報を与えることを指す。

次に RQ②に関して、非飽和名詞と飽和名詞の例を取り上げ、à は文脈上非飽和的に捉えられる N1 を飽和化する操作に寄与すること、avec は飽和的な N1 に説明を加えていることを述べる。

最後に、à が上記のような識別的・飽和化機能を担うことについて、à の空間的用法（Je suis à Osaka. J'habite à Paris.）に代表される、定位機能の帰着であることを示す。

主要参考文献：Anscombre J.-C. (1990), “Pourquoi un moulin à vent n’est pas un ventilateur”, *Langue Française* 86, 103-125. / Cadiot, P. (1991), “À la hache ou avec la hache ? Représentation mentale, expérience située et donation du référent”, *Langue française* 91, 7-23. / Cadiot, P. (1993), “À entre deux noms : vers la composition nominale”, *Lexique* 11, 193-240. / Schapira C. (2005) “La formation du tout : à entre-deux noms”, : *Scolia : Sciences Cognitives, Linguistiques et Intelligence Artificielle* 19, Du rapport partie/tout en linguistique de corpus : varia, 93-105.